



Title	臨床哲学というプロジェクト
Author(s)	鷺田, 清一
Citation	臨床哲学ニューズレター. 1998, 2, p. 1-4
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/81729
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

[I 《臨床哲学》元年へ向けて]

臨床哲学というプロジェクト

鷲田清一

哲学という学問は、大学においてじつに奇妙な位置を占めている。

哲学はまず、〈知〉の基礎、〈知〉の権限、〈知〉の可能性を問う作業のことである。そのかぎりでは〈知〉の体系的な一環としてのあらゆる学問は、みずからのうちに哲学的探究という作業を含んでいなければならない。この学問はなにを対象とするのか、どういう方法でそれらにアプローチしていくのかという学問の出発点の問題は、人間の知的な一環全体の中での当該学問の位置づけと定義とを含んでいる以上、すでに哲学的問題である。哲学的探究はその意味で、あらゆる学問がそのベーシックとして内蔵していなければならないもの、内蔵しているはずのものなのであって、したがって哲学は〈知〉の制度的機関である大学の一専門領域を占めるべきものではない。〈知〉にかかわる者はみななんらかのかたちで哲学にかかわっているものであって、哲学が「文学部」のなかに、一専門領域として位置づけられていることは、その学問上の性格からしてとても奇妙なことである。このことは、哲学を専攻する者が常日頃奇妙に思っているが、居心地がよいのか、あるいはむしろ現在の大学のなかでみずからのたしかな場所を確保するので精一杯という防禦体制にあるからか、あまり強調されてこなかったが、よく考えればやはりあやしむべきことである。

が、哲学は、それとは別の意味においても、大学のなかで奇妙な場所に立っている。

哲学は、〈知る〉ことの権能を無前提に認めはしない。それは、〈知る〉ことの根拠を、そしてその限界を問う。そのように問うみずからの問いの権利根拠への問いをも含めてである。〈知る〉ことを問題にする〈知〉であるかぎりでは学問・科学そのものであるが、〈知る〉ことの根拠や限界を問うという意味では、〈知〉の制度、つまり学問・科学の外部に位置する。そのかぎりでは、「基礎」にたいする「応用」というのはまったくちがった意味で、哲学は大学の内と外を橋渡しするような位置にある。哲学は大学外の〈知〉、アカデミズムというかたちで制度化されていない〈知〉とも深く「連帯」している。つまり哲学は、しばしば制度化された

〈知〉の批判者、あるいはパラダイムの更新者としてふるまう。「愛智」という名を古代ギリシャにおいてあたえられた哲学が、職業化（＝講壇化）されていないアマチュア（愛する者 *amator=lover*）というあり方をしばしばきわめてポジティブに評価してきたゆえんである。

もっと軽やかな口ぶりで語りはじめるべきところを、「哲学」をめぐるこのような大仰な議論とともにはじめたのも、じつはわたしが勤務している大学の哲学講座の一角で、哲学を大学の外部へとつなげてゆく試みをはじめたからである。

わたしの勤務している大学の大学院に、来年度より臨床哲学という専攻分野が設置されることになる。いまの段階ではまだ予定としか言えないが。もっとも、《臨床哲学》というのはまだ名ばかりである。作業が進んでいないからではない。この試みはわたしが所属している講座で三年前にプロジェクトを組んで以来、研究会や研修を重ね、ニューズレターも刊行してきた。その活動は新聞でも何度かとりあげていただいたし、名ばかりではけっしてないのだが、この試みを大学の外部につないでゆくことが、いまの制度規定のなかでは絶望的と言っていらいむずかしいという意味で、大学という制度のなかにおいて名ばかりなのである。臨床哲学というかたちで哲学のいとなみを大学の外部につないでゆくことは、国立大学といういまの制度のなかでは、いろいろな制限がありすぎてほんとうにむずかしい。すきまをぬってやるしかないのである。

哲学を大学の外部へとつないでゆくと、とりあえず言ったが、大学の外部という言い方がほんとうはおかしいのである。大学が社会の内部にある以上、つまり社会のなかで制度的に保障された機関としてある以上、大学とその外部との関係というものも、社会的な関係の一つだからである。そういう社会関係のなかで〈知〉というもののあり方を考えたときに、わたしには哲学の（すくなくともその）一部は〈臨床〉的に転回しなければならないように思われた。

さて、その臨床哲学である。臨床哲学とは、医療の哲学や生命哲学、生命倫理のことではない。それも含みはするが、医療でいう臨床に限定することなく、社会のさまざまな困難、さまざまな臨床的な場面に、哲学的思考をつなげてゆく作業を意味している。（臨床哲学といえば、解剖学の養老孟司さんも九十年代に入って「臨床哲学」の語を使われ、昨年ずばりそういうタイトルの著作も出されたが、同じ概念を使う以上、問題意識に接点はもちろんあるはずだし、可能であればいろいろ二つの臨床哲学の作業をリンクさせてることも考えてみたいと思うが、わたしどもが取り組みつつある臨床哲学は養老さんのそれとは別の発想から出発している。）

臨床哲学は、文字どおり社会の「現場」に臨んだ哲学のあり方を意味する。社会の「現場」にかかわる学問というのはさまざまにありうるし、また直接か間接か、陰か陽かといった相対的な差異に目をつぶれば、いかなる学問であれ社会にかかわらない学問などというものはおそらくありえないだろう。臨床哲学がさしあたって臨もうとしている社会の「現場」というのは、ある人が、苦しみのなかにある別の人にその苦しみとともに耐える、ともに苦しみぬくというかたちでかかわってゆく場面のことである。医療、看護の場にかぎらず、教育という場、家族という場、そして労働の現場をも含む。ある人が他人の苦しみに苦しまないではいられないという、他人の苦しみに苦しむという場所、そういう場所に哲学にかかわる者としてかかわってゆくこととして、臨床哲学はある。だからそれは哲学の一ジャンルではなく、社会への哲学の一つのかかわり方のことである。それぞれの「現場」でほんとうに問題であることを取りだし、それを現場のひとつとともに考えぬく場として、臨床哲学は構想されている。生きること、病むこと、老いることの意味、死の迎え方、教える／学ぶという行為の意味、家族という関係、協同して働くという関係、企業のあり方、他人になにかを伝えるという報道のあり方について、それが最終的に問題となっている「現場」でともに考えるということである。

これはなにも特殊な作業ではない。ひじょうに主観的な感想かもしれないが、時代の困難そのものがある意味ではとても「哲学的」になっているような気がしてならない。たとえば老人介護、性差別、臓器移植、遺伝子レベルでの生命操作、環境汚染、民族紛争、少年犯罪、公共性の再構築、都市計画のあり方……。このように思いつくままにならべただけでも、そこでは老いの意味、〈わたし〉とはだれか、家族とは、都市とは、民族とは、国家とは、自然とはなにかといった「哲学的」な難問に正面から向きあわずには、解決の道筋がとうてい見えないようなそういう困難が数多くあるのが、よくわかる。これの根っこにあるのは政治や経済の技術的な問題ではなく、まさにフィロソフィーの問題である。

そういう難問が堆積している「現場」でひとりの「哲学研究者」になにができるのかと問われれば、ほとんどなににもできないかもしれない。ごくわずかなことしかできないかもしれない。それでもそういう「現場」にかかわってゆこうとするのには、この時代のなかで哲学することの意味を問うこと、あるいはもうすこし突っ込んで言うと、哲学が哲学でなくなる臨界線がこの時代にあるかどうかを確かめたいという、哲学内部からの強い動機もある。

臨床哲学の試みは、三つの〈反－哲学〉的な契機を含んでいる。

それはまず第一に、書くこと、語ることとしての哲学ではなく、聴くといういとなみとしての哲学を模索する。みずからの言葉を語りだすのではなく、むしろ他者の言葉を迎え入れ、受けとめる行為、そういう意味での聴くという受動的な行為がもつポジティブな力に賭けるということである。聴くこと、言葉を受けとめることが他者じしんの自己理解の場を劈（ひら）くという、かつて古代ギリシャの哲学者がおこなった「産婆術」と呼ばれる対話のなかに入ることである。思考のモノログではなく。

第二に臨床哲学は、だれかある特定の他者に向かってという、単独性ないしは特異性の感覚を重視する。つまり、匿名の普遍的な読者に対してではなく、だれかある個別の人に向かってするような思考である。それはつまり一般的規則の一例（イグザンプル）を問題にするのではなくて、個々の特殊な場面（ケース）にかかわろうとする。

第三に臨床哲学は、あらかじめ所有している原則を前提とし、それに一致または整合するかどうかでものごとを分類・評価するのではなくて、むしろそういう一般的原则が一個の事例（ケース）によって揺さぶられ、場合によっては崩される経験として、哲学の経験をとらえる。ちょうどメルロ＝ポンティが、哲学をして「おのれの端緒がたえず更新されてゆく経験」として定義したように、である。

主張するのではなく〈聴く〉ということ、普遍化が不可能であるということ、そして最後に〈臨床〉が「哲学する」者として臨床の場に臨む者の経験の変容を惹き起こす一つの出来事でもあるということ、このような三重の意味において、臨床哲学は反－哲学的であろうとする。そしてこれは、あらゆる〈知〉の基礎づけということのみずからの課題としてきた従来の哲学、というより哲学の概念への批判的な問いかけでもある。

このような《臨床哲学》の理念について、わたしは一年前から雑誌『季刊アステイオン』（TBSブリタニカ）において「聴くことの手——臨床哲学試論」という連載論考のかたちで論じており（臨床哲学のこの三つの反－哲学的契機については第三回に述べた）、くわしくはそちらを見ていただけるとありがたい。

いろいろな困難や未消化の問題が山ほどあることは承知している。それについて、同僚たちといろいろ議論してもきたが、ここでは臨床哲学の理念と（哲学というコンテクストにおける）その周辺のことがらについてのみ述べた。

（『学士会報』No. 818）